

一九八〇年代の雑誌『宝島』と核の「語り易さ」

山本 昭宏

はじめに

文学における核の語り難さはしばしば指摘されるところである。核被害について書くこうとする者が直面する「果たして書くことができるのか」「これで書いたことになるのか」という自問や、核をめぐる状況を「文学作品」に昇華させることの困難などがそれにあたる。これは軍事利用に限られた問題ではない。民事利用についても同様だろう。原子力発電所に象徴される巨大科学技術と人間との関係を文学の言葉はいかに書くことができるのだろうか。この問いの前に、人は口ごもらずを得ない。

ただ、これらの課題を軽視するつもりはないが、ジャーナリスティックな媒体に目を転じれば、戦後のマスメディアが意外なほど気楽に核を語ってきたということも、また確かなことであるように思われる。送り手と受け手の双方にとって、核は強い関心事であり、過剰なほどに核が語られてきた側面は無視できない。

核が過剰に（あるいは素朴に）語られるとき、その場では何が

起こっているのか。この問題を、一九八〇年代の雑誌『宝島』を事例にして考察することが本稿の目的である。『宝島』を事例として選択することの妥当性について述べるためにも、まずは先行研究を整理しておきたい。

東日本大震災とそれに伴う津波が引き起こした原子力発電所の事故以降、反原発運動への関心が高まる中、雑誌『宝島』に言及した論考は、少ないながらも幾つか存在する。中でも代表的な論考として挙げられるのは、結秀実『反原発の思想…冷戦からフクシマへ』（筑摩書房、二〇一二年）である。同書の第五章「反原発としての『宝島文化』とその背景」は、『宝島』と『別冊宝島』が体現した「宝島文化」について考察している。一九八〇年代の反原発運動は、従来の社会運動とは異なり、エコロジーや精神世界を称揚する「ニューウェーブ」としての側面が強かったが、この「ニューウェーブ」の運動を支えたものとして、結は「宝島文化」を位置付けているのである。さらに、編集者の石井慎二や評論家の津村喬など、『宝島』と『別冊宝島』に関わった人達のネットワークを解明し、彼らの志向性を析出している。

結の論考で特に興味深いのは、ポピュラー音楽のアイコンを指して、「彼／彼女らが、『宝島』に登場する重要なキャラクターであったことは言うまでもない。それは狭義の日本的ヒッピームーブメントをこえて、広く「サブカルとしての反原発」を若い世代にプロパガンダした」と述べている点である^①。「サブカルとしての反原発」という指摘は卓見という他ないが、若い世代に対するプロパガンダという指摘に関して言うと、雑誌メディアの機能を考えれば、雑誌が固定読者の趣味趣向を強く方向づけるのはあ

る意味では当然のことである。加えて、後に本稿のなかで明らかにするように、一九八〇年代の『宝島』における反原発関連記事の数は、結がプロバガンダという強い言葉を使うほどには、多くない。ましてや、『別冊宝島』が反原発関連の特集を組んだのは一九八〇年代においては一度だけである（『別冊宝島』81 原発大論争！ JICC出版局、一九八八年）。結の議論は、「ニューウェーブ」の反原発運動の結節点として JICC 出版局（宝島社）が果たした役割を説得的に解明しているが、「サブカルとしての反原発」が社会運動にとって何を意味していたのかという点については考察されていない。また、運動の文脈を離れたところで、雑誌『宝島』の誌面構成が反原発のメッセージをいかに伝えようとしたのかという問題についても考察の余地が残されている。

本稿では、編集者やライターたちの意図を『宝島』から読み取るのではなく、分析対象を編集者やライターから雑誌媒体そのものに移して、多様なコンテンツの集合体としての『宝島』が誌面の上で結果的に実践してしまったような反原発運動の戦略を、記事間の相互作用やその語り方、読者の投稿に着目して解明していく^②。

アメリカ文化誌から総合情報誌へ

本論文が扱う雑誌『宝島』について、基本的情報を整理しておく。

一九七三年、晶文社の出資を受けたワンダーランド社が月刊誌『ワンダーランド』を創刊する。創刊当初のコンセプトは、編集

者で音楽評論家の植草甚一を中心にアメリカ文化を紹介するといふものであった。ワンダーランド社は、一九七四年に JICC 出版局によって買い取られ、誌名も第三号から『宝島』と改名したものの、誌面の内容はほとんど変わらなかった。評論やエッセイやコラムを通して、アメリカ西海岸の若者文化とされた音楽、ドラッグカルチャー、精神世界の紹介に力点を置き続けたのである。表紙デザインには『平凡パンチ』の表紙イラストを手掛けたことで有名な大橋歩や、マンガ雑誌『ガロ』で活躍した佐々木マキなどを起用し、日本の漫画やファンタジー、SF、絵本などの紹介も精力的におこなう文化雑誌であった。

雑誌『宝島』に明確な変化が訪れるのは、一九八〇年代に入ってからである。同時代の『POPEYE』（平凡出版（後にマガジンハウス）、一九七六年）、『Hot-Dog PRESS』（講談社、一九七九年～二〇〇二年）、『BRUTAS』（平凡出版（後にマガジンハウス）、一九八〇年）といった若者向け雑誌の好調を意識して、八〇年代初頭の『宝島』は、価格の値下げを行うとともに、アメリカ文化の紹介という要素を薄め、急速に情報誌へと変貌していった。

雑誌の創刊が相次いだことからわかるように、一九七〇年代後半は、若者読者を想定した月刊情報誌の興隆期であった。例えば、『POPEYE（ポパイ）』は、『宝島』と同じくアメリカ西海岸の若者文化に取材していたし、『Hot-Dog PRESS』はマニユアル型情報誌として新しい若者のライフスタイルを提唱していた^③。その他、読者参加型の雑誌として『ビックリハウス』（バルコ出版、一九七四年～一九八五年）があり、フリーライターのコラムや読者からの投稿を主軸に誌面を編集していた。これらの雑誌は、新

聞や総合雑誌などが形成してきた政治経済をめぐる言論や、文芸誌や美術雑誌、映画雑誌が形成してきた文化に関する言論とも異なるような、新しいスタイルの提示に成功するとともに、都市に住む若者（とそれに憧れる地方の若者）の読者を可視化させた。『宝島』にとつての一九八〇年代前半は、若者向け総合情報誌への脱皮期であつたと考えられる。そして、一九八七年には、ついに判型を『POPEYE』『Hot-Dog PRESS』『BRUTAS』に倣つてA B版（ワイド版）に変更し、「ポジティブな生活情報マガジン」「全国ライブ&イベント情報、ビデオ、映画、TV、ゲーム、ファッション、雑貨、アート、演劇、ストリート総合情報」を謳うようになった。この謳い文句は、あらゆる風俗・文化・商品を扱うという宣言であつた。

この頃になると従来の表紙デザインにも変化が訪れる。従来はイラストのみで構成されていたが、最新ファッションを身につけた男女の写真や、歌手やロックバンドなどポピュラー音楽のアイコンたちの写真が使われるようになり、誌面にはカラーグラビアの頁が採り入れられるようになった。若者向け総合情報誌へと舵を切った『宝島』の中でも、特に前面に押し出されたのは、ポピュラー音楽であつた。八〇年代の『宝島』は、矢沢永吉、忌野清志郎、YMO、中島みゆき、チェッカーズ、ブルーハーツ、米米クラブなど、ポピュラー音楽のアイコンを頻繁に誌面に登場させ、若者情報誌としての存在感をゆるぎないものにしていく。

ポピュラー音楽と原発のメッセージ

一九八〇年代初頭の日本では、核の民事利用と軍事利用について、それぞれの議論が盛り上りをみせていた。

一九七九年のスリーマイル島原発事故は、日本のジャーナリズムの関心を原発へと向けさせたが、影響力を持ったのは原発推進の声であつた。それを端的に示すのが、『朝日ジャーナル』一九八〇年二月二十九日号に掲載された、朝日新聞論説主幹の岸田純之助とロベルト・ユンクの対談「原子力時代 二つの立場」である。岸田は原発事故の可能性について「社会が豊かになることの、いわば必然的にとまなうコスト」であり、そのコストを減らす努力をしていくべきだが、すぐさま原子力発電所を手放すというのは考えられないとしていた。一方、ドイツ人ジャーナリストで反核・平和運動家としても知られ、一九七九年には原発批判の書『原子力帝国』（山口祐弘による邦訳も同年）を上梓していたロベルト・ユンクは、原発のような「ピック・テクノロジー」から、より人間的な「ソフト・テクノロジー」への転換を訴えていた⁽⁴⁾。しかし、一九七九年に国際核燃料サイクル評価（INCEP）が使用済み核燃料の再処理について肯定的な評価を下し、さらには高速増殖炉開発の必要性についても言及していたことが示すように、世界の趨勢は核エネルギーの民事利用をいつそう推進する方向に向かつていたと言えるだろう。

一方、核の軍事利用に関連する話題としては、清水幾太郎が提起した核武装論がある。清水は『諸君』一九八〇年七月号に日本の核武装を主張する「日本よ国家たれ」を掲載し、論壇の関心を

集めていた。一九七九年二月のソ連によるアフガニスタン侵攻を受け、「経済大国」日本に負担を求める国際世論への反発があったのだろうか、日本でも防衛論や改憲論が盛んになり始めていたのである。また、一九八二年には、中距離ミサイル配備の反対運動に端を発した西ヨーロッパでの反核運動に呼応し、日本の文学者たちが「核戦争の危機を訴える文学者の声明」を発表していた。

このように、核に関する議論が過熱し、広い関心を引き付けていたにもかかわらず、一九八〇年代初頭の『宝島』の誌面には目立った反応はみられない。この時期の『宝島』に掲載された反原発関連記事としては、ロンドンの反核団体 CND (Campaign for Nuclear Disarmament) が主催したロックフェスティバルの紹介記事（一九八三年九月号）や、高知県窪川町での「反原発キャンペーン」の告知（一九八一年七月号）があるに過ぎない。

ただし、JICC出版局は、原発批判本、広瀬隆『東京に原発を！』（JICC出版局、一九八一年）を刊行していたことからわかるように、反原発運動の一端を担っていた。数は少ないながらも、若者向けの総合情報誌には異質な反原発のメッセージが挿入されたのは、JICC出版局の姿勢の表れとみるべきであろう。日本国内のポピュラー音楽のアイコンとの結合という観点から一九八〇年代の『宝島』における反原発メッセージをみると、その最初の例は「尾崎豊の『アピール』 アトミック「反核」カフェ」（一九八四年一〇月）であった。

後に『宝島』は、ポピュラー音楽のアイコン（それは往々にしてロックやパンクというジャンルのアーティストたちであることが多

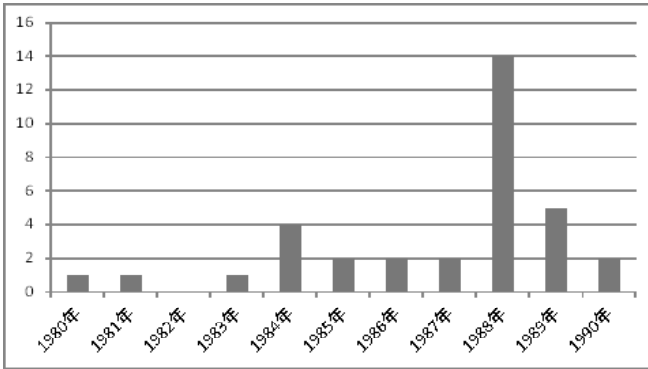
かった）の名前を列挙し、彼らが反原発に意識的であるという文章を付け加えることで、反原発のキャンペーンを推進していくが、その端緒はこの尾崎豊に関する記事であった。

興味深いのは、一九八六年四月に旧ソ連のチェルノブイリで起こった史上最悪規模の原発事故直後の『宝島』にも、チェルノブイリに關係する記事や特集が存在しないということである。これは一部の総合雑誌、オピニオン誌がチェルノブイリ原発事故直後に特集を組んでいるのと対照的である⁶⁾。この事実からは、『宝島』編集部が原発事故に即座に対応できるようなライターを抱えておらず、他誌とは異なる情報ルートを有していなかったという推測も可能である。『宝島』を介した編集者たちと読者たちの双方が、原発事故をさほど「魅力的」なものとして受け止めなかったと指摘することもできる。反原発だけでは弱く、そこに「ロックフェスティバル」や「キャンペーン」といった若者向けの要素が付かないことには、誌面に載せる価値はないと判断されたのではない。言い換えれば、『宝島』が反原発へと傾斜していくためには、チェルノブイリの原発事故を受け止めた日本社会において反原発のメッセージを取り込んだポピュラー文化が顕在化する必要があったのである。

一九八七年には、チェルノブイリ後の食品輸入検査体制への不信感から、市民団体や研究者たちが独自に輸入食品の放射線測定を行うようになっており、子どもを持つ母親の立場を前面に出しながら原発を批判した甘諸珠恵子『また、まにあうのなら』（地湧社、一九八七年）や、広瀬隆『危険な話』（八月書館、一九八七年）が話題になっていた⁶⁾。さらに、一九八八年一月には伊方原発出

力調整試験と三号機建設に反対するデモが起こっていた。

『宝島』にとって決定的だったのは、一九八八年に噴出した「反核・反原発ソング」の存在である。RCサクセションの「ラヴ・ミー・テンダー」（東芝EMI）発売中止が有名だが、その他にもTHE BLUE HEARTS（ザ・ブルーハーツ）の「チエルノブイリ」（ジヤグラール）、佐野元春「警告どおり 計画どおり」（エピックレコー



【一九八〇年代の『宝島』における核関連記事数の推移】⁽⁷⁾

ド）などが『宝島』誌上で取り上げられ、インタビュや解説などが掲載された。ベストセラーやポピュラー音楽の出現の後、『宝島』に反原発の記事が目立ち始めるのである。一九八〇年代の前半においては、ロックやパンクといったポピュラー音楽を紹介する過程で、反原発のメッセージが焦点化されていたが、一九八八年になると、反原発のメッセージがポピュラー音楽を飲み込

み始めたのである。

一九八八年の目次構成と言説の様態

一九八八年の『宝島』がどのような言葉で反原発のメッセージを紡いでいたのかを見る前に、目次構成における『宝島』の戦略を確認しておきたい。

一九八八年の『宝島』には、ほぼ毎号の誌面に反原発関連記事が掲載されていたが、それはあくまで多様なコンテンツの一部であり、決して誌面が反原発に染まったわけではない。しかし、反原発関連記事は基本的に目次の前四分の一のスペースに、比較的大きめの字で配置され、読者に強くアピールする構成になっていた。目次構成だけを見ると、反原発関連記事は例外というよりは主要記事の一つという位置を占めていたことがわかる。それゆえに、ストリートファッションやスクーターなどの風俗、パンクスやアルバイターなどの新たなライフスタイル、マンガやB級映画などの文化といった、『宝島』が強調していたコンテンツと反原発のメッセージとが同列に並んでいることが視覚的に諒解できるようにになっていた。

では、どのように配置された記事は、反原発のメッセージをどのような言葉で語っていたのだろうか。『宝島』における反原発の語りの特徴は次の二点、すなわち①反原発のメッセージと新たな若者のライフスタイルとの接続、②徹底した口語調の語り、である。

反原発のメッセージと新たな若者のライフスタイルとの接続という点を検討するためには、『宝島』一九八八年六月号に掲載された

七頁にわたる特集「[ATOMIC CRISIS]」をみるのがわかりやすい。

この特集は、チエルノブイリから二年を期し、原発への警鐘を鳴らすことを目的としており、その冒頭にはブルーハーツの楽曲「チエルノブイリ」の歌詞が引用されていた。頁をめくると、原発をテーマにしたドキュメンタリーや映画、ポピュラー音楽の紹介、原発の危険性を訴えるエッセイマンガ、ブックガイド、原発運動団体のリストなどと並んで、「反原発運動に関する文句とささやかな提案」という記事がある。その記事は、読者に対する次のような呼びかけから始まっている。

宝島少年・宝島少女よ！ 君たちの大好きなブルーハーツは「チエルノブイリ」という歌を歌っている！ RCや浜田省吾も歌の中で反核をアピールしている！ ニューエスト・モデルのチラシを見てくれ！ ほかにも多くのミュージシャンが『危険な話』の衝撃を語っている——池畑潤二（ゼロ・スペクター）が、伊藤銀次が、奥野淳士（ローグ）が、OTTO（JAGTARA）が、小玉和文（ミュー・ビート）が、タイニー・パンクスが。ななきやとえが、マリオ（D-DAY）が、美尾洋乃が、雪好（レピッシュ）が、与太郎（メトロファルス）が！！⁽⁸⁾

ロックやパンクに関わる音楽家たちの名前を列挙し、そこに君も連なろうという呼びかけである。そして、この記事は、「広瀬隆トーク・ライブ」をレポートし、そこに集まった若者の多くが「フツ」の学生か、おたく族「だったことを憂いた後、次のように続ける。

君たちが、真剣に原発問題に取り組もうという熱意（のよななもの）は感じるができる。なんとなく……。署名ひとつすることだつて、立派な行動だ。そこからもう一步踏み込む手段として、「君自身をもっと格好良く見せる」ということを、僕は提案したい。やっぱり外見が違うだけでも、見た目のインパクトが違うでしょ？ それはもう、重要な反原発運動の一環として考えてもらつていい。⁽⁹⁾

この記事の中では、単に反原発運動に参加するだけではなく、『宝島』が紹介するポピュラー音楽を聴き、『宝島』が紹介する衣服を身につけることが、格好良いものとして提案され、それも「反原発運動の一環」だと語られている。反原発のメッセージを、『宝島』の誌面に載せる際には、そのメッセージを格好良いもの、従来とは異なるものとして価値づける必要があったのである。このような操作によって、読者たちが好きなポピュラーカルチャーを語るのと同様に、核を語る素地ができたと言える。

この種の呼びかけの例は他にも存在する。一九八八年五月号では、作家のいとうせいこうによる提案として、既存の反原発集会などに参加せず一人で「自宅闘争」を行うことが推奨されていた⁽¹⁰⁾。いとうせいこうは、早稲田大学在学中から芸人、ミュージシャンとして劇場で活躍し、卒業後に講談社に入社してからも、俳優業を行うかたわら、エッセイや小説も書くというマルチな活動で知られる人物である。ライター、作家、文化人などという従来の肩書が無効に思えるほど、多様な方面で活躍した。糸井重里となら

んで、一九八〇年代における文化のフラット化を体现する人物であると言えるだろう。

二点目の特徴である徹底した口語調の語りについては、既に先に挙げた引用文が示していることでもあり、さらには一九八〇年代以降の若者向け雑誌におけるコラムやエッセイから同種の例を容易に見つけ出すことができるだろうが、ここでは景山民夫というせいこうによる対談を引用しておく。

景山

省エネルギーっていうと、どうもケチでやってるとか、貧乏人の発想っていう風にとらえがちだけど、ほんとは金持ちの方がやりやすいんだよ。ところが日本の金持ちはライフ・スタイルが確立していないから、いきなり豪邸建てて、全部のドアを自動ドアにしちゃったりしてさ。トイレなんか人が通るたびに開いちちゃったりしてやんの(笑)。(11)

いとう もうファッションとしてもカッコ悪いってね。でも、私たちはどうすればいいんでしょう、いとうさん頑張ってください、っていう手紙もダサイぞ(笑)。

景山 電気使い放題で原発建てさせて、それでも楽しけりゃいいやっていうのは、確かに考え方としてはあると思うけどね、どっちがバカかって言うと、そりゃそっちのヤツらがバカ(笑)。もう理論的にバカが証明されているんだから、そいつらに面と向かってバカと言える。これは快感ですよ。ウンコぶつけちゃう。

いとう 最後は必ずウンコだ(笑)。(12)

電力の浪費を戒めるこの対談では、軽薄でくだけた口調が強調され、笑い声を意味する「(笑)」という記号が多用されている。

このとき『宝島』が示しているのは、節電の勧めではなく、軽薄でくだけた口語調で原発について語っても構わない、というメッセージである。読者たちに対して、好きなポピュラーカルチャーについて友達と何かを語るように反原発について語る方法を実践してみせたのである。このような語り口が好まれたのは、従来の政治的運動やそれにシンパシーを感じる人たちのどこか観念的で原理的で男性主義的な語り口に対する違和感や差異化の欲求が、若い世代にある程度共有されていたからだと考えられる。

実は、日常生活のなかで持つ違和感や周囲にある奇妙なものについて、面白おかしく語ることが、『宝島』が創刊当初から称揚してきた作法でもあった。それを担ったのが、『宝島』の人気連載投稿欄「VOW(「バウ」と読む)」である⁽¹³⁾。奇妙なデザイン看板や広告、雑誌の誤植などをあげつらい、そこに面白く「ツッコミ」を入れるという読者投稿を中心に、一コマ漫画やイラストレーション、コラムなどが所狭しと詰め込まれた「VOW」は、既成のコードをいかに面白く崩すかを競う場でもあった。景山民夫といとうせいこうの両者は「VOW」にコラムを連載しており、いわば『宝島』精神を代表する二人でもあったのである。

読者たちの実践

特集「ATOMIC CRISIS」に話を戻して、読者たちが『宝島』を

通してどのような読者共同体を構想していたのか、考えてみたい。

特集「ATOMIC CRISIS」の頁の欄外には、「直接行動をしなくても、反原発の意思表示はできる！ みんなのハガキによって、署名運動に変わる反原発の意思表示をしようというイベントが進行中だ」という呼びかけが記載されていた⁽¹⁴⁾。欄外に小さく書き込まれたハガキの募集は、一九八八年八月号で発表された集計によると、一万四四通という成果をもたらした。

八月号の誌面に掲載されたハガキの例は八通で、ハガキの横には書き手の情報として「学生（二七歳）」「学生（二七歳）」「専門学生（一九歳）」「アルバイト（二〇歳）」「アルバイト（二一歳）」「会社員（二二才）」「イラストレーター（年齢記載なし）」「匿名（年齢職業ともに記載なし）」と記載されていた⁽¹⁵⁾。なかでも、「アルバイト」は、この時期の『宝島』が称揚していた新しい「ライフスタイル」である。編集部による選別を考慮せねばならないが、『宝島』が展開した反原発運動への動員キャンペーンを支持したのは、一〇代後半から二〇代前半の若者であり、『宝島』の影響を色濃く受けていた層だと推測できるだろう。

また、記事のなかでRCサクセションのレコードが発売中止になったという事件に言及している点も見逃すべきではない。

一〇〇四四人が思い思いのやり方で、それぞれの意思表示をしている。特に一〇〇二〇代の若者、この宝島を読んでいるキミらと同じ世代が必死で行動を起こそうとしている。（中略）さて、八月にリリースされる予定だったRCサクセションの新譜『COVERS』が、みんなも知つてのとおり突如発売

中止になってしまった。このLPの中で、清志郎はストレートに反原発の姿勢を表している。発売中止はいつたい何を意味しているのか。⁽¹⁶⁾

このように、反原発のメッセージを伝える記事のなかに、ポピュラー音楽のアイコンを挿入するという戦略が徹底されていたことがわかる。

では、反原発ハガキの企画で可視化された十代後半から二十代前半の読者たちは、どのような言葉で自分自身を語っていたのだろうか。「全国から届いた脱原発の声」（『宝島』一九八八年一〇月）は、読者からの投稿欄になっており、次のようなメッセージが掲載されている。

福井県敦賀市に住んでいる自称PUXXの高校生です。私の家から一〇kmと行かないうちに原発があります。こんな危険なところに住んでいて、その危険さに今頃気づいたのかと思うと、自分が情けなく思えたりしました。（敦賀市・SU・♀）⁽¹⁷⁾

私のいなかには福島県の相馬市というところなのですが、私が一九歳の時、浜通り（福島に一〇基ある原発は全て浜通り地方）にある、原子力発電所区内に家族でドライブ行っちゃいましたよ。今でもよくおぼえている風景ですが、いなか町には本当に不釣り合いな立派な道路や建物。原発の所内はもろろんのこと、周りの民家まで立派なのは、どーゆーことだ。それから、海から湯気がたつてるのにも驚きました。工場からはドドドーとい

う感じで海に水（お湯？）を流していました。その付近は変な魚がよく漁れるそうです。（横浜市・MK・♀）⁽¹⁸⁾

私は恋愛もしないうちに死ぬわけにはいかないです。考えてみたら、私まだなんにも持っていない。人を本気で好きになったこともないのかもしれない。自分よりも大切に思える人にも、まだ会えていないよ。もともとと時間がないとわからないこともたくさんあるよ。なんにもないまま死にたくないよ。（横浜市・NS・♀）⁽¹⁹⁾

『宝島』の編集部が選択した読者の声を見る限りでは、非常に素朴な恐怖感・拒否感が重視されていることがわかる。二点目に挙げた引用は、『宝島』が提示していた軽妙な口語調の模倣として捉えることができるし、三点目の引用にある素朴な心情を反原発に直結させる語りも、従来の運動にはなかった「ニューウェーヴ」的な語りとして理解することができるだろう。投稿者の年齢は書かれていないが、投稿が紹介された八人のうち、男性は一人だけで、残り七人は女性であった。この読者からの紹介は、多くの読者欄のように、雑誌の末尾に置かれていたわけではない、目次上で強調されただけでなく、約一八〇頁の誌面のなかでも前半部に配置されていた。

「読者の声」が編集者やライターたちの創作であったという可能性が全くないとは言い切れないが、仮にそうだととしても先に挙げたような『宝島』を読んだ若者の声」として提供されたメッセージを読んだ若者たちは、自分と同じ考えの人たちがいる、と

思ったかもしれない。それまで「反原発」に関心を持てなかった『宝島』読者も、同世代に反原発の声を上げている人たちがいるのだ、という感想を持ったと想像される。『宝島』が可視化した「反原発の声を上げる若者」というイメージは、このようにして拡散していったのだと考えられる。

一九八九年に入ると、関連記事は減少するが、『宝島』の反原発のメッセージはいつそう鋭くなっていく。反原発運動の実践方法を読者に教示する記事が出現するのである。そこで重視されたのは、やはり新しさであり、楽しさであり、格好良さであった。

どうせやるなら、今までの「組織」や「団体」がしなかったような、楽しくて効果的なアクションを作ろう。いつまでも昔風の、チャンチキなデモ行進なんかを繰り返している場合じゃない。時代は変わったのさ。数万人の「集会」が何になる？ ゴーカなパンフレットがどうした？ そんなものより、ライブ・ハウス規模のイベントや、手づくりのチラシやシールのほうが、人の心を動かすかもしれないぜ！ 効果的かもしれないぜ！⁽²⁰⁾

このような呼びかけのあと、記事では、ミニコミ、チラシ、シール、バッジなどの作成法、反戦・反核コンサートの運営法、原発関連企業の製品不買運動などが解説される。この文章を書いたのは、「THE 100 CLUB（ハンドレッド・クラブ）」と名乗る一団である⁽²¹⁾。彼らは『宝島』に寄せた反原発運動の解説をさらに充実させ、『No nukes! Yes rock!』（リトルモア、一九九〇年）という書

籍も発行している。しかし、一九九〇年に入ると、『宝島』の記事はさらに減少し、内容も簡素なものになっていく。そこには、昭和天皇の死とそれによるメディアの自粛が影響していたのかもしれない。

しかし、『宝島』がいわゆる「ニューウェーブ」の運動の中で、孤立していたということも考えられる。そもそも、『宝島』は反原発のメッセージを軽妙に格好良く提示することに成功したものの、少なくとも誌面の上では、ヒロシマ・ナガサキと連なるそぶりもみせなかったし、チェルノブイリの被曝者たちに強い関心を払ったわけでもなかった。もちろん、伊方原発訴訟など、従来の反原発運動との連続性は確認できるが、むしろ誌面の上では、核の「語り易さ」を前面に押し出すことで、従来の運動との断絶を強調していたのだと言える。しかし、『宝島』は孤島だったという見取り図を描くには、当時の運動に携わった人たちへの聞き取り調査が不可欠であろう。さらに同時代の他の若者向け情報誌が『宝島』の試みに反応したのかどうかも精査する必要がある。その作業を行っていない本稿が示唆できるのは、次のことだけである。つまり、『宝島』が読者に提示した核の「語り易さ」は、あくまで誌上の他のトピックとの連関において価値を有したのであり、そこから核の問題だけを抜き取って深化させたり広めたりするのは最初から困難であったのかもしれないということである。

おわりに

以上、雑誌『宝島』が展開した、反原発運動への参加を促す戦

略を浮き彫りにしてきた。『宝島』は反原発に特化していた雑誌ではない。ただ、数は多くないが強いメッセージを目次構成や記事のなかに配置し、反原発のメッセージをポピュラー音楽のアイコンや若者のライフスタイル、ファッションと結びつけ、それらを口語調で語るといふ姿勢を提示した。『宝島』は、これらの要素を「格好良い」ものとして誌面の中にパッケージし、読者に提示したのである。これによって、読者たちは自分たちが好きなポピュラーカルチャーを語るのと同様に、反原発について語ることができるようになった。従来は、「被爆国」という立場から、冷戦構造を念頭に置きつつ、科学技術の進歩とその倒錯という問題系のなかで語られがちだった核が、一人一人の若者たちの経験レベルで扱うことのできる「語り易い」ものになったのである。そして、それゆえにこそ、『宝島』は、継続的に原発問題に取り組む読者層を、例えばポピュラー音楽に親しむ層のようにには固定化できなかつたのではないだろうか。ポピュラーカルチャーが核に言及しなくなれば、読者たちの核への関心も急速に薄れていかざるをえなかつたのである。

ただし、一九八〇年代の『宝島』で反原発のメッセージを提示していた書き手のなかでも、たとえばいとうせいこうなどは、現在も反原発の姿勢を継続している。これを考慮すれば、『宝島』が形成した言論は、一九八〇年代のみで途絶えてしまったというわけでもないのかもしれない。果たして『宝島』に豊かな資源があったのかどうか、二〇一〇年代を生きる私たちが自らの手で調べてみるしかないようである。

【一九八〇年代『宝島』における核関連記事リスト】

80	6月	J・Pは期末レポートに『原爆設計図』を提出した！
81	7月	やろうぜ！反原発大キャンペーン
82		なし
83	9月	UK反核フェスティバル・レポート
84	1月	ロンドンの若者は、なぜ今「反核」に動き出したのか？
	4月	なぜなにキーワード図鑑25 核
	10月	特集「ゴジラがくる！」
		尾崎豊の「アピール」——アトミック「反核」カフェ
85	3月	反核のロック・フェス、アトミックカフェ
	5月	サンセツツも参加の世界最大反核コンサート
86	1月	ポール・ウィラーも座り込み！！反核への熱いムーブス。
	9月	ウッドストックを超えるか？ CNDフェスティバル大盛況
87	9月	CND…拡大するヨーロッパ最大の反核フェス
	12月	広瀬隆ギゲ
88	3月	VISIONS OF WONDERLAND チェルノブイリ事故直後の衝撃映像
		今月の馬つ鹿でえー！9 景山民夫
	4月	自宅闘争者の日記1 いとうせいこう
		今月の馬つ鹿でえー！10 景山民夫
	5月	自宅闘争者の日記2 いとうせいこう

88	6月	特集・ATOMIC CRISIS 131-136
		自宅闘争者の日記3 いとうせいこう
	7月	自宅闘争者の日記4 いとうせいこう
	8月	緊急特集 RC『COVERS』発売中止！
		反原発ハガキ 「一枚のハガキが原発をとめる」全 国のKIDSから届いた熱いメッセージ。
		自宅闘争者の日記5 いとうせいこう
	9月	原発をめぐる考えてほしい事
	11月	反原発EXPRESSIONS 原発問題の現在はどうな っているのか、広瀬おろしの矛盾を指摘する、読者の 声
	12月	反原発EXPRESS 景山民夫がいとうせいこう
89	2月	LONG INTERVIEW 忌野清志郎
		WONDERLAND EXPRESS 原発展に東京電力が圧 力！？
	3月	WONDERLAND EXPRESS 脱原発へ署名活動スタ ート
	7月	WONDERLAND EXPRESS 脱原発運動in 89
	9月	WONDERLAND EXPRESS 2年ぶりに開かれた反 核フェス
90	1月	WONDERLANDEXPRESS 89年、日本の原発事情（青 森県八ヶ岳所村を焦点に）
	5月	WONDERLAND EXPRESS あれから4年目のチェル ノブイリ

注

1 結秀実『反原発の思想…冷戦からフクシマへ』筑摩書房、二〇一二年、三〇一頁。

2 本文中に挙げた『反原発の思想史』の他に、『宝島』に言及したものとしては、菅孝行・黒古一夫・外山恒一・結秀実「反核から反原発運動へ…一九八〇年代のオーラルヒストリー」（近畿大学国際人文科学研究所『述5』二〇一二年）を挙げることができる。『反原発の思想史』とほぼ同じ文脈で『宝島』が位置づけられているが、一九八〇年代の反原発運動が終息した原因に、昭和天皇の死とそれによるメディアの自粛があったのではないかと示唆している点が興味深い。

その他、『宝島』への言及はないものの、一九八〇年代の反原発・脱原発運動に関する運動論的研究で本稿と関連するものとして、本田宏『脱原子力の運動と政治…日本のエネルギー政策の転換は可能か』（北海道大学図書刊行会、二〇〇五年）がある。本田は、チエルノブイリ原発事故以後に起こった既成政党との関与の薄い市民運動に注目し、市民運動に時間を割く余裕のある比較的高学歴の主婦層の台頭がそれらの運動を支えたと指摘している。これに対して本稿では、『宝島』に注目することで一〇代後半から二〇代前半の若者層について考察を加える。

3 岡田章子『『poppy』におけるアメリカニズムの変容と終焉…若者文化における「モノ」語り雑誌の登場とその帰結』吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史…変貌する戦後パラダイム』森話社、二〇一二年、一九三—一九五頁。

4 ロバート・ユンクと岸田純之助による対談「原子力時代 二つの

立場」（『朝日ジャーナル』一九八〇年二月二九日号）のほか、若尾祐司「反核の論理と運動…ロバート・ユンクの歩み」（若尾祐司・本田宏編『反核から脱原発へ』昭和堂、2012年）も参照。

なお、この時期のメディア言説で、原発からの転換を訴えたものとしては、A・ロビンズ「エネルギー危機は克服できる」（『エコノミスト』一九八〇年二月二六日号）を挙げることができる。環境保護団体「地球の友」イギリス代表であったA・ロビンズは、太陽光や風力などによるエネルギーを「ソフト・エネルギー」と呼び、「ソフト・エネルギー」の開発を訴えていた。

5 チエルノブイリ原発事故直後の雑誌特集に、『技術と人間』一九八六年六月号の「チエルノブイリ原発事故」、『文藝春秋』一九八六年七月号の「チエルノブイリ・シンドローム」、『諸君』一九八六年七月号の「原発事故と技術情報社会」などがある。

6 本田宏『脱原子力の運動と政治…日本のエネルギー政策の転換は可能か』北海道大学図書刊行会、二〇〇五年、二〇三頁。

7 目次に記載されていないコラムなどでも、核への言及があるものはカウントした。一九八八年六月号の「特集・ATOMIC CRISIS」は漫画やブックガイドなど多様なコンテンツを含んでいるが、タイトルのつけられていない記事や欄外のコメントなどもあったため、特集を一つの記事とした。同様の理由で「WONDERLAND EXPRESS」や「反原発 EXPRESS」といったコンテンツの集合体も一つの記事としてカウントした。リストは本稿の末に記載。

8 「反原発運動に関する文句とささやかな提案」『宝島』一九八八年六月号、一三六頁。

9 同上。

10 いとうせいこう「自宅闘争者の日記2」『宝島』一九八八年五月号、一八七頁。

11 「反原発 EXPRESS 景山民夫 vs. いとうせいこう」『宝島』一九八八年一二月号、一五三頁。引用に際しては、読みやすさを考慮して発言者名を太字にした。

12 同上。

13 「VOW」とは、読者からの投稿を中心に構成された欄「Voice of Wonderland」の略称。

14 「欄外コメント」『宝島』一九八八年六月号、一三六頁。

15 「反原発ハガキ 「一枚のハガキが原発をとめる」全国の KIDS から届いた熱いメッセージ」『宝島』一九八八年八月、一一頁。引

用に際して算用数字は漢数字に改めた。以下もそれに従う。

16 同上。

17 「全国から届いた脱原発の声!」『宝島』一九八八年一〇月、三八頁。

18 同上。

19 同上。

20 「反原発 EXPRESS」『宝島』一九八九年七月号、一一頁。

21 THE 100 CLUB (ハンドレッド・クラブ) は、「ライブハウスなどで知り合った一人のパンクスが集まって活動する、反核・反原子力のグループ」。「反原発 EXPRESS」『宝島』一九八九年七月号、一一頁。